

特集

第3弾

議会を傍聴して

第3回目は、噴火湾文化研究所 永山優子さんに12月議会を傍聴して頂き、その後、日をあらためて感想とご意見を伺いました。

●は永山優子さん ●は議会広報委員

◎議会を傍聴された感想は？

●議会を傍聴するまでは形式的な議論がなされているのではというイメージでしたが、「人対人」の議論にはライブ感があり活字で読むよりも親身になって聞きました。まるで野球の試合やコンサートで感じるような直に見ることで得られる現実味がありおもしろさもありません。質問する側(議員)は市民感覚でわかりやすい言葉を使っていて聞きやすかったですね。

◎興味のある議題はありましたか？

●全てに興味をもちました。日本の社会全体が考えなければならぬ問題もあり耳を傾けやすかったです。そして様々な課題に対して伊達市はどうするのか、また自分自身はどうするべきかも考えることができました。いじめ問題や性教育への取り組みなどは、人の気持ちや心の問題も踏まえて議論をしてくる考えさせられましたし、身近の問題としてとらえることができました。また自治会についても話題になりましたが、最近引越して、以前は一軒家だったので隣近所の方と交流がありません。

●だが、今度はアパートに移り、身近に住んでいる人を知ったり交流したりという機会は意外に少ないと感じるようになりました。コミニケーションや回覧板もそうですが、「無縁」という言葉を感じるような方向に進まないことが大切だなあと。互いの安心安全を守っているという意味で自治会を人のつながりとして考えると、決して、他人事ではいけないんだと議会を傍聴してその気持ちは強くなりました。

◎伊達市に住んでみていかがですか。

●伊達市は自然や文化に触れやすいおもしろいまちだと思います。

●例えば有珠山の噴煙をみた時は、少し怖かったけれど、それもこのまちの特性の一つであり、そのようなまちにはそのまちなぎや文化があり、それは特徴にもなり得るんだとあらためて感じました。

●先日ある都市で友人



と会った時に思ったんですが、巨大ショッピングモールのような施設は、まちの特徴や特性にはならないが、「自然」や「文化」がそのまちの特性を創り出すんだと。そのまちでとれる特産物の違いや人の気質の違いがまたおもしろいし、家のつくりなどまち並みの違いも特性のひとつです。

●都会のように文明的に豊かになる以外に、伊達市は別の豊かさも見つけることができるまちであると思います。伊達市は感性を磨ける機会の多いまちで、人生をゆっくり見つめることができるまちであり、「よしやってみよう」という自分のやりたいことを後押ししてくれる人が多くて、生きがいを見つめることができるまちだと感じています。

●伊達市に住んでしばらくしてから故郷に帰った時、私の故郷の特性はなんだろうとまた違う視点でみられるようにもなりました。

◎伊達市に必要なものは？

●今よりももっとまちづくりに夢中になれる人が多くなれば、もっと良いまちになると思うし、必要だと感じています。

●伊達市にしかないものを伊達市の中で作っていくことが大事で、それは商店街でもそうですが、大きすぎないからこそ、かゆいところに手が届いて、人間味を感じら



れるサーブスが地元を大事にできる軸になると思います。そんな「人」と「人」とのつながりがもつと感じられるまちであるべきだと思います。

住んでいる私たちも、札幌や苫小牧などより大きなまちに出ていくばかりではなく、伊達市の中の良いものに接していくべきだと思います。

飲食店、地元企業や昔ながらの専門店など伊達にも良いものや良い腕をもった人はたくさんいるのですから。

◎今の仕事についてお話しを聞かせて頂けますか。

●今、私は噴火湾文化研究所で絵画教室をさせて頂きながら、自分自身のテーマで作品づくりをさせてもらっています。そうした仕事の中で、伊達市の特性を探り、伊達市の歴史文化を通じて人の心を育んでいけるようなまちにするための一端を担えたらと考えています。

この伊達に来て、こうした仕事をさせて頂く

中で、いろんなことに気づかされました。絵画教室や作品づくりの中で、自分の人生を振り返ることが多くあって、原点に戻って考えることや、視野を広く感じることができるようになりました。それはこのまちに来て、たくさんの人に出会い、それが自分に良いきっかけを作ってくれているからだと感じています。

例えば、今回の議会でも話題になっていた刀鍛冶ですが、渡辺刀匠からとても大きな影響を頂いています。ご存じかもしれませんが、外国の放送局が撮られた渡辺刀匠のドキュメント映像があるんですが、渡辺刀匠のとても高い志がその美しい映像の中に描かれていて、こんな人が伊達にいたんだと驚かされました。渡辺刀匠はその中で、「継承してきたことを守り、それを次の世代に正しく伝えたい。もしそれが時代のニーズに合わないということでも、その思いを曲げなければならぬのなら、刀鍛冶の文化は滅びてもいい」と語っていて、その決意と魂に感動しました。こうした渡辺刀匠のような人がこのまちにいるということでも自分もこんな思いをもって仕事に打ち込まなければと感じました。

私は、プラス思考で人生の在り方を作品にしています。それは日常会話で気後れして言えないような心の中を表現することや、大きな夢を形にしていくようなことです。作品をつくりながら、人としてどうありたいか考え続けることが大切であると思い取り組んでいます。

◎野田弘志先生らとの三人展が昨年は大阪、東京、札幌で開催され、伊達市のPRにもつな



がりました。今年の予定をお聞かせ頂けますか。

●伊達市で2年に1回展覧会を開催させて頂いています。昨年は伊達市市制40周年ということで札幌での開催もさせて頂きました。それがきっかけとなって公的な美術館でもやってみないかというお誘いも頂いています。ただ公的な美術館だと10点20点では作品が足りず、中央の作家にも呼びかけなければならぬので、簡単なことではありませんが、伊達市から発信して人が集うということを考えています。

人を惹きつける、それは伊達市が志していることにもつながるし、私が思うのは時間がたってもさびれないもの、それを私たちは文化の面から大きく謳っていきたくて考えています。

また、これからも絵画教室をする中で次世代のアーティストが出てきて継承してくれたらうれしいし、私たちと絵を描くことに生きがいを感じてくれる人が出てきてくれるだけでもうれしく思います。

◎今日はあひがひのびがひでした。